

概念と直観

三つの特徴

私は来年三月の本典講習会の用意のために、数行信証を今新らしく拝読しかえていますが、聖人を知れば知るだけ三つのことがらに驚くのであります。それは何であるか。きりつめて言えば、

一。聖人の頭脳は極めて冷たく、明晰で、論理的であったこと、即ち正しい概念の持ち主であったことがその第一である。

二。第二は聖人は、単に頭の人でなくて、その概念全体が、熱き直観の火に燃え上つていたこと、即ち聖人は熱の人であったことである。

三。この頭と胸、論理と信とが完全に統一されて、ここに金剛不壊の腹が出来ていたことが第三である。

冷たき頭、温き胸、動かぬ腹、動く手足ということとは、何時も言っていることではありませんが、聖人にはこれが全て完備されていたのであります。

芸術的傾向の人は、温い胸はあつても、冷たい頭がなく、動かぬ腹がない。熱き信があるようでも、情のまにまに流されてゆく。結局、信といつても、一種の芸術的な陶酔境でしかない。

論理型の人間は、頭は出来ていても、それが情意の実践の世界とかけはなれて、何時も論理だおれになつて、得たり賢しになつて、自己凝視が足りない。

冷たき論理

よく田舎の人などが「光明団の講演はよいのはよいが、あれは理屈だ。御信心にはむつかしい理屈はいらない。唯信じさえすればよいのが他力である。」とこんなことを聞かされる。しかしその正しい論理のない信心が結局現在のあのだらしない教界の空気をつくつたのであり、青年及び知識階級を追い逃がしたのでないか。だが、聖人は正しい概念の骨格のない信を喜ばれるであろうか。ただ信ずればよいのなら、何を信じてもいいはずだ。何を信ずればいいのか。如何に信ずればいいのか。聖人には、極めてはつきりした論理があり、骨格があつた。教行信証一部六巻、とても頭をはつきりしなければわからない。

聖人の頭は極めて冷たい。いやしくも、論理上承認されないことは、遠慮なく棄ててゆかれた。喩えていうならば、平安朝の方、日本には臨終正念、来迎往生が極めて盛んに信じられた。横川の源信和尚なども、盛んにこの来迎の有難さを説かれた。凶画に、書物に、和讃に、死ぬる時に聖衆の御来迎があつて、紫雲たなびき、芳香かおり、天華天楽の中に往生する、という思想信仰がある。法然聖人すら「柴の戸に、あけくれかかる白雲を、いつ紫の色に見なさん」（玉葉集）と詠じられた。それほどまでに無条件に時代を動かした信仰も、聖人の信の前には永遠の真理ではなかった。来迎往生の如きは、人間の不純な心の生み出せるものであつて、他力本願の撰取不捨のわからない世界のこととして、ひとたまりもなく打ち超えて、現生正定聚を肯定された。

これは一例であります。聖人は常にかくの如く、一切のものに必ず、鋭き論理のメスをあてて、必ずこれを解剖し批判して、生かすべきを生かし、殺すべきを殺された。これ即ち、とても真理に忠実な大慈悲の人でなければ出来ないことでもあります。化身壺の如きは、法界一元の南無阿弥陀仏に立脚して、一切の虚偽、権仮を完膚なき迄に検討批判されたのであります。

「理論の信仰ではない。ただ信ずればいいのだ」というような、やくざな人間には聖人の信樂の天地はわからない。聖人にとっては学問と信仰とは二つのことではなかつた。信の火の中に学問の薪を打ち込んでゆくことが生活そのものであつた。

正しい概念の樹立のない信仰は畢竟、最後の力とはならない。自己及び人生を生かす宗教とはならない。唯、涙の情の宗教だから、その涙のかわいた時、情のさめた時には、信も亦なくなつてゐる、手足に動く宗教、人生全体を生かす宗教にはならない。よし有難いと喜んでいても、一歩つきこまれると、なくなつてしまふのである。

熱き直観

所が、この正しい概念をつかむということは同時に、熱き体験、直観ということ拒むものではない。否、その概念の骨格が、赤き火に燃え上つてゆく所に、全き信があるのです。この点についても聖人ほど信に徹底された人はありません。さながら南無阿弥陀仏の火そのものであります。何ものも焼きつくされる火であります。

現代は、教界全体にこの火の消えた時と言つてもいい。澆刺として生命の火に燃えている人が少い。論理が真に論理として生きるのは、この信のあつき情熱の力を得てはじめてなされることである。もしこの信の火なしに、教行信証が弄ばれるならば、それは誠に閑人の骨董いじりであり、単なる思弁哲学であります。正しい概念が、信を指導し、信が概念を力あらしめるのであり、信が概念の骨格を求め、概念が信の薪となつて、はじめて真に正しい宗教が生れて来るのであります。

聖人は一度十八願の信樂、南無阿弥陀仏一元の信の世界に誕生せられるや、聖道、浄土を超えて、一切の経論釈を引き取り来たつて、勝手に自由に、これを取りこまれました。そしてたとえ師の世界であろうとも、発展の余地のあるものは、これを発展させ、師匠の言わんとして未だ至らなかつた所、師匠の衷心に動いていたものをつかんで生かし、その時代にのみ通用したようなものは（たとえば先の来迎思想）遠慮なく棄てられました。それは実に正しい信のものだけがなし得ることでもあります。

動かぬ腹

第三は動かぬ腹であります。これは、正しい概念と、熱き信とから来る必然の世界であります。

日蓮の折伏の剣も、聖人の信の前には針ほどの力もなく、流罪も、山伏弁円も、聖人の前に何ものでもない。念仏の流るる処、願力の大船の動く所、衆禍の波は転じて、法悦の甘露となり、怨敵も変じて同胞となり、憎悪も転じて大慈悲となります。徹底せる愚禿の諦観と、業報の深信は、如何なる美しき言葉も誘ふによしなく、如来

金剛の大信は、不退正定衆に住せしめて、大安住の座にゆるぎはありません。かくて、内と外との一切の生死動乱の波も、これを如何ともすることの出来ない、南無金剛の大信心、無碍の念仏道は、聖人の全体となったのであります。よしそれが地獄のどん底であろうとも、一度念仏の白蓮華上に安座する時、共產に浄土の安らかさと、静けさが訪れます。

「念仏して地獄におちたりとも……」と聖人の口真似の上手な者はいくらでもあ
る。しかし、いざ今日の生活となると、単に気に入らない人間がいるとか、議論で勝
てそうにないとか、馬鹿にしたとか、それだけのことですら、逃げてゆかうとする。
或は一寸、常識的な世間の批評ぐらいで、行動を二三にしたり、飽くまで真理に忠実
でなければならぬ僧侶が、間違ひと知りつつ今日の一日の安柴を盗むために、それ
をよう超えなかつたり、易行違である他力の道を難行道にして、いよく深い迷妄に墮
ちてゆきます。金剛の念仏腹がないからです。それはみんな、正しい概念がわかつて
いないからであり、熱き体感の火の消えた世界にいるからであります。

仏法は「体解」すべきであります。体全体で頂くべきであります。頭だけでもいけ
ない。胸だけでもいけない。腹だけでもいけない、冷たい頭、熱い胸、動かぬ腹、そ
れが一体になった時、はじめて聖人の金剛不壊の信境はわかるのであります。